

教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が
付く教科書」を求めて

考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に会い、
どんな「付き合い方」をしてきましたか。

長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、
試行錯誤を重ねた現場の教師たちから「できる日本語」という
新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で
教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと
共有していきたいと思います。

第4回

「わかる」から 「できる」へ

「キャンドウ (Can-do)」って何？

日本語教育の世界で「能力記述文」(Can-do-statement)という言葉がかなり前から使われるようになりました。時には略して「Can-do」と言ったりしています。

実は、2010年度から新しくなった日本語能力試験では、「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)を設け、記述例の一部として、次のようなことを挙げています。

「聞く＝学校や職場、公共の場所でのアナウンスを聞いて、大まかな内容が理解できる」、「話す＝アルバイトや仕事の面接などで、希望や経験を詳しく述べることができる」、「読む＝関心のある話題に関する新聞や雑誌の記事を読んで、内容が理解できる」、「書く＝感謝や謝罪、感情を伝える手紙やメールが書ける」

こうした「Can-do-Statement」で言語教育を考える動きは、世界的に広がってきています。例えば、アメリカのACTFL(全米外国語教育協会)や欧州評議会が提示したCEFR(ヨーロッパ共通参照枠)などを見ても、「Can-do-Statement」がベースになっています。

しかし、日本語教育では長い間、「～ことができる」という表し方で学習目標を

表したり、評価に活用したりすることは、あまり活発に行われてきませんでした。日本語能力試験も以前は、1級の認定基準に、次のように記されていました。「高度の文法・漢字(2,000字程度)・語彙(10,000語程度)を習得し、社会生活をする上で必要な、総合的な日本語能力(日本語を900時間程度学習したレベル)」。

どれだけ言語知識があるか、学習した時間はどの程度か、といった視点が色濃く出ており、「日本語を使って、何が、どのようにできることが求められているのか」といった視点は、見えませんでした。ところが、「新生」日本語能力試験は、「課題遂行のための言語的コミュニケーション能力」を測定対象能力とする試験に生まれ変わり、「Can-do-Statement」が前面に出てきたのです。また、国際交流基金では「JF日本語教育スタンダード」を作成公開し、その一環として、「みんなの『Can-do』サイト」というデータベースを公開しています。

こうした日本語教育の変化は、「試験では高得点が取れるのに、運用能力が身に付いていない人が多い」、「どうしたら、『使える日本語』が習得できるのだろう」といった現場の声に、後押しされてきたといえます。それはまさに「『わかる』から『できる』への移行」でした。

「できる」を重視した教科書

ある日本語教室で、こんな会話が交わられていて、愕然としたことがあります。

講師：おととい、何を勉強しましたか。

学習者：〇課です。比較です。

講師：じゃあ、ちょっと復習しましょうか。電車とバスとどちらが速いですか。

飛行機と電車と……。

それは、「文型積み上げ式教科書」を「忠実に」使い、あくまで文型練習に主眼を置いた日本語支援でした。私は、「学習者が、今日学んだ日本語を使って、何ができるようにになったのか実感できる授業」がなぜできないのだろうと、改めて考えさせられました。

では、比較表現はどんな時に、何のために使うのでしょうか。ここで、「できること」を重視した『できる日本語』を見てみましょう。この教科書では、6課で比較表現を勉強します。場面は「学校でクラスメイトを誘う」、学習目標は「誘って、友達の意向を聞いたり、情報を比べたりしながら相談することができる」です。具体的には、二人で雑誌を見ながら、こんな会話が進んでいきます。

A：Bさん、いっしょに映画を見に行きませんか。

B：いいですね。どこで見ますか。

A：あっ、「にこにこ映画館」と「ふじ映画館」があります。

B：そうですか。「にこにこ映画館」と「ふじ映画館」とどちらが近いですか。

A：「にこにこ映画館」のほうが近いです。

B：そうですか。じゃ、「にこにこ映画館」へ行きましょう。

同じ「口の練習」でも、「飛行機と電車とどちらが速いか」などと、わかりきったことを聞く練習とは、考え方が全く違います。これが「できること」、Can-do を重視した教科書の魅力の一つなのです。

口 シアから来たアレックさんは今、『できる日本語 初級』13課を勉強しています。授業が終わって教室を片付けていたA先生に、彼はこう尋ねました。

「あのう、土曜日、日本人とデートをします。私、大丈夫ですか」

A先生は、すかさずこう答えたのです。

「アレックさん、大丈夫、大丈夫！この教科書でたくさん勉強しましたね。1課で名前、国、趣味。4課で国と町。アレックさんの町の話、面白かったですよ。8課では家族と友達、そして9課で趣味を、いろいろ話しました。だから、デートは大丈夫です！」

これを聞いてアレックさんは、意気揚々と帰って行きました。土曜日のデートの結果は……。きっといろいろなことを語り合っ、楽しい時間を過ごしたことでしょう。



嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。著書に『目指せ、日本語教師力アップ！—— OPIでいきいき授業』（ひつじ書房）『キムチと味噌汁—韓日、異文化交流のススメ』（教育評論社）『ワイワイガヤガヤ 教師の目、留学生の声——異文化交流の現場から』（教育評論社）など多数。『できる日本語』（アルク）監修

- 連載ラインナップ
- 第1回 教科書を考えるって面白い！
 - 第2回 どんな教科書と付き合ってますか？
 - 第3回 タスク先行型授業にチャレンジ！
 - 第5回 漢字学習も「できること」重視！
 - 第6回 「プロフィジェンシー」で、教師力アップ！ 1
 - 第7回 「プロフィジェンシー」で、教師力アップ！ 2
 - 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
 - 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
 - 第10回 自律的な学びを支えるモノ
 - 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは？
 - 第12回 対話で新たな日本語教師人生を！